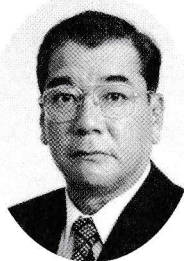


芦屋から堺、そしてまた芦屋へ



上塚
弘

梅雨の真っ只中、集中豪雨を思わせる激しい雨足は堺市での波瀾万丈の幕開けにふさわしいものであった。

びっしょ濡れになりながら、小さな袖看板を入り口の外に出して、さあ—これからやと思った時、大屋さんが血相を変えて飛び込んできた。

「看板出してもろたら困ります」

「医者看板やおまへん。腕や！腕で勝負しなはれ」

「看板だすうちは自信のない証拠や」とえらい剣幕。ご自身の土地でもない歩道の上、なにかにつけうるさかろうとお隣の居酒屋さんの延長線に出したキャスター付きの看板。医院名を書いたごく小さなもの。(後日電通の友人から小さすぎると指摘を受けました)「お願いします、置かして下さい」と家内ともども頼み込み「1ヵ月だけでっせ。1ヵ月」とプツと帰られます。芦屋からわざわざ来ていただいた知人のおばさんには「雨の日の開店は縁起がよろしいふりこむ、ふりこむ、客が舞い込むと言いまっせ」と慰められ、1月14日以来やなあ、このユニットのモーターの音を聞いたり、ヘッドライトを着けるのはと思うと、震災で亡くなった友人、患者さん、折角福岡会長のお骨折りで開設することが出来た仮設診療所も閉めて「芦屋で一緒にがんばろうや」の声を振り切り診療所を移したと、様々なことが急に脳裏を掠め、「お父さん。お母さん助けてや！」と手を合わせてしまいます。こんなことで大丈夫かいなあと思問してみたり、心的動揺は平静に戻ることなく開院時間となりました。

堺市での再開は7年7月3日ですから、ドカーンと揺れ、バツと飛び出してから一度も住みに戻ることなく、2回の取出しを経て解体。公光町の家は跡形も無く、夏草がしぶとくもところどころに顔を出していました。

実は当時芦屋で再開出来るとは夢想さえしなかったことでした。ご承知のように住んでいました公光町の一画は区画整理区域にされました。こうなりますとその土地の上に建物を建てるのに、大変な制約があるそうです。当初は新聞等を見ていまして十分理解出来ませんでした。「たいへんなことになりましたなあ。区画整理とはですなあ…」とわざわざ教えにきていただいた方からもなかなか要領が得ません。従って家と診療所のことはあまり考えないで、そちらからはむしろ目を逸らすようにしていました。ただ公光町の土地は、芦屋川が天井川になっているところから、国道側から見れば2階建てが、裏からは3階建てと、段差があります。同じような建物

はたてられないなあという認識はあり、もう一生涯家を建てて住むことはないと言っていました。これには区画整理の制約とは関係なく経済的な要素が大きく占めていました。つまりそんな大金は持ち合わせていませんでした。堺からの帰り道、中学以来の友人が大阪北新地で一席設けてくれました。大きな会社の役員をしていますから私より世故に長け、なにかと相談に乗ってくれます。曰く「土地はすぐに公的機関に売る。お前は金を持っててもあかんから、すぐに代わりの土地を見付ける。これ以上借金をしたらあかん！」学生時代と違って随分はっきりと断言をしました。

その気になって公報を見てみますと、公社が土地を買い上げるとあります。早速に話を聞きますと、幸い私の所は土地家屋は自己所有で条件は合致しています。しかし公社の方にも買取りの予算があり、締切が設定されており、俄然逼迫した事態になりました。大きな不動産会社の経営されている先輩に聞きますと「この話は進めなさい。次の土地はしっかり自分で見付けてきなさい」助言を得ました。「お父さんこれでええんか？お母さん間違いないなあ？」と問い掛けようにも仏壇は地震でバラバラ、取り敢えず西方におるやろうと、西を向いて手を合わし、生まれて初めて自分で決断をしました。

それからの土曜日、日曜日は歩いて、歩いて、歩きに歩いて探しました。あらかじめ目星を着けた土地は、10メートルの紐を用意してさり気なく測ったり、飛び上がって視えない所は壁をよじ登ったりして…。蝨潰しに探すこととはこんなことやと歩きに歩きました。めっこを着けた土地は、次の日に家内が調べに行く。しかし素人の悲しさなかなか思うような物件は見つかりません。疲れ果てたころ、打出小槌町に角地の格好の土地が見つかりました。名前も縁起がよし、これやと思い先輩に報告しますと「土地の方は調べた。土地も経歴があるんや」「問題なし！」の返事。大きな工務店の社長になっている友人は親切にもボーリングをして調べてくれました。以前より敷地は狭くなったものの、ほぼ等価交換で再び家が建てられる。しかも住み慣れた芦屋の地で!!これは落ち込んだ私にとっては大変な励みになりました。

それでも天はまたまた試練を与えてくれます。決して“もうええよ”と許してくれません。7年11月8日のことでした。前日高等学校の同窓会。震災で亡くした友を偲び、これからの再起を誓い、会は例年になく異様に盛り上がりました。しんどいなあ、寒気がするなあと帰宅して熱を測ると39度。“風邪やな、明日は日曜や、まあ

一日休んだらなんとかなるやろ”と思っていましたが日曜日にも熱はどんどん上昇し41度まで、伊藤病院に点滴をしてもらうも、座薬を入れても夕方にも解熱せず、上辻祥隆院長が往診。夜中から左背中にキリキリと強烈な穿刺痛、痛みは左を下にすれば強くなり、そうこうしているうちに仰臥位がとれなくなり、布団を背中に当てて完全な起坐呼吸“えらいこっちゃ”と思うよりも“痛イー痛ッタッタ”と呻くだけ。“なにが起こったのや？”不安と痛みで一睡も出来ず思い余って階上にお住まいの瀬野武先生に連絡をとりました。夜明前に伊藤病院に入院。「左の肺が真っ白です。鮮明にニイーボウーもあります。肺炎です。すぐ入院してください」かくして昭和55年開業以来初めて病気による休診となった。入院と宣言され、むしろほっとしました。しかし入院後も一向に解熱する兆しがなく、4～5日は座薬の世話になりっぱなし。

なんでも当初 CRP は38mg/dl WBC は28,000に上昇していました。入院7病日目から、リアンプシンが投与されました。尿が真っ赤に染まるなんて全く知らず、遂に血尿やとがっかりして、立ち上がる気力も無く、しゃがみ込んでしまった便所事件。やはり1ヵ月の入院は驚くほど体力を無くします。駅での階段の昇降速度が極端に落ち、接続電車でことごとく遅れてしまいます。手摺りをもったり、踊り場で一息つくなんてほんまに情けないおもいがしました。

その間も話が着々と進み、退院と同時に契約に漕ぎ着くことが出来ました。抵当に入っている土地から、その抵当権を一旦はずし、新たな土地に設定をしなおす。規則とはいえ、ばかにならん額の手数料を銀行に払わねばなりません。「せっかく利子補給してもろても効果なしや。またお金出さなあかんのかあんとこの偉いさん。あこぎやで。誰や？」「県の会長先生です」兵庫県医療信用金庫からやとうっかり忘れていました。

茶パツというよりほとんど金髪の若者が河内弁を流暢にしゃべり、どの都市よりもサラ金が多く、駅を出ると20mも歩かない間に、ティシュペーパー（サラ金の広告）、チラシタバコでポケットがーパイになる不思議の町堺。男の職員がみんなとっていいほどピアスを着けている郵便局。ゲーム・センターは早朝から開け、しかも登校途中とおぼしき子供がやっている。信じられますか？初めて見たときは目が点になりました。

俗に言われます開業ではやる条件は、じばん、かんばん、かばんやそうです。かんばんはもぎとられ、かばんの中身は日頃の浪費がこたえて貯えよりも借金、じばんは少し離れた所に盛業中の三代も

続いた耳鼻科があります。大きな市庁舎や郵便局、裁判所があったり、中心地であることは確かですが、ドーナツ現象は顕著で夜間人口は極端に少なく、地域に密着して開業というより、完全なビル開業診察時間は朝9時から夕方6時までぶっとおしで働き、昼休みは無しとしました。少しは期待していた患者数は思ったほどのびません。役所にお勤めの方々のために昼休みを開けておりましたが、どうやら休み時間に、診療所にいくという発想はなく、その時間帯に訪れる患者さんは皆無でありました。それでも、なにかとたいへんやろうと連日心配して覗きにきてくれた友人。毎日のように通気療法に通っていただいたおばあさんも、鼻茸が充満して、ネビュライザー療法の効果があるんかいなと疑うようなおじいさんも芦屋とは極端に病態が異なり、手術適応症例が多く、いい意味での緊張感がありました。ぼちぼちですが私を信頼して紹介していただける医院も増えました。

もう少しの辛抱やと毎日思っていました、前に述べた肺炎による入院以来、急に電車を通うのが億劫になり、気分は落ち込む日が続きました。それに加えて住む所と診療所の家賃、諸々の掛け金、返済金を払ってしまえば、基金からの診療報酬でトントンという生活はいかんともし難く意気込んで堺やと行ったからには今更「あかんかった」弱音は吐けずさりとてこのまま続ければ借金を重ねて、末はお向かいの裁判所へいき自己破産かと思うとますます気分は減入りました。思い余って会長に相談しますと「それやったら帰ってきたらよろしいがなあ」とにこやかに言われ、つかえていたものがすうーと通ったようになりました。

堺の診療所の内装をしていただいた友人、先輩は「どうもそんな気がしてたわ」とそっくりそのまま芦屋の方に運んでいただいたり堺の医師会からは退会弔慰金やといくばくかを返していただいたり僅かの間やったが楽しかったと言われてほろっとしたり、いろんなことがいっぱいありました。あれもあった、こんなこととも思い出しても、いまとなつてはすべてが楽しい思い出になっています。どうやら心的外傷後遺症も軽快したようです。餞別のお返しもしなければと思ってるうちに、慌ただしく、帰ってまいりました。地震のなせる仕業とはいえ、まあ皆様方にはほんとうにお世話になりました。この紙面をお借りして厚く御礼申し上げます。